

前橋城址之碑

前橋市大手町一丁目一番一號 縣廳土壘北東ノ隅

前橋城址碑

勅選議員正四位勳三等文學博士重野安禪撰

前橋城未詳創置舊作廐橋後更今字蓋長野氏之族廐橋氏世守之云其地在上野國中央利根川
 流西妙義榛名赤城諸山遙峙西北稱為形勝永祿初上杉景虎來據此城蹂躪八州前橋之名著於
 世後屬武田氏織田右府滅武田氏使其將瀧川一益為關東管領以鎮於此及右府遭害一益西奔
 遂歸北條氏北條氏亡德川氏徙關東平岩親吉居之尋封酒井侯重忠至八世孫忠恭寬延二年轉
 封姫路而松平侯朝矩來代以利根川每歲漲溢城壁漸壞圯明和四年請幕府移治川越城遂廢矣
 百年重鎮一旦丘墟士民之住此者不能無遺憾焉後數十年築堤疏渠治水有法河身亦漸遷徙於
 是始有再築之議時朝矩君之裔直侯君當國銳志以圖改修迨直克君襲封遂復請幕府而創役士
 民間之舞蹈驩欣富者輸財壯者獻力經始於文久三年至慶應三年工竣規模比前頗廓至是凡九
 十六年而是復舊觀是歲遷自川越藩士從者數千戶口日殖此地素富物產絹絲之利尤饒藩吏亦
 懲慇勸獎輸出洋外者極多既而王政革新廢藩置縣復毀城郭方是時人心皇皇懼或衰替幸父老
 營畫百計朝廷亦以其地固為都會置群馬縣廳於牙城以治一國有衙署學校之設有公司館廠之
 舉街衢日趨殷富人口今贏四萬見施市制然嚮者撤城遷治井邑蕭條儻非有直侯直克兩君再築
 之功安得觀今日之隆興乎哉於是舊封士民追念其遺德謀所以諗來者乃卜城址一隅以建碑使
 委員某來謁予文因叙古今興廢盛衰之概系以銘曰

上毛之野 古稱豐殖 及彼亂離 弱肉強食 地居必爭 民莫得息 幕府置鎮 勳舊親藩
 懷柔撫綏 煦濡有恩 無奈河患 壞此城垣 誰再營築 維松平氏 崇墉有屹 河水清駛
 產業勃興 繭絲麻枲 維茲都會 鬱為名區 樹碑紀德 永懷勿渝 喬松敷蔭 古城之隅
 明治四十一年三月 從五位伯爵松平直之題額 正五位日下部東作書

【旧字体】 前橋城址之碑

前橋市大手町一丁目一番一号
勅選議員正四位勲三等文學博士重野安繹撰

前橋城は未だ創置を詳らかにせず。舊くは鹿橋に作り、後に今の字に更む。蓋し長野氏の族、鹿橋氏世これを守ると云ふ。その地は上野の國の中央に在り。利根川西に流れ、妙義・榛名・赤城の諸山遙かに西と北とに峙す。稱げて形勝と爲す。永祿の初め、上杉景虎來りてこの城に據り、八州を蹂躪して、前橋の名世に著る。後、武田氏に屬す。織田右府武田氏を滅ぼし、その將瀧川一益をして關東管領と爲し、以てこれを鎮め使む。右府、害に遭ふに及び、一益西奔し、遂に北條氏に歸す。北條氏亡びて、徳川氏關東に徙り、平岩親吉ここに居す。尋いで酒井侯重忠を封ず。八世の孫忠恭に至り、寛延二年姫路に轉封して、松平侯朝矩來り代はる。利根川毎歲漲溢し、城壁漸く壞圯するを以て、明和四年、幕府に請ひて治を川越に移し、城、遂に廢せらる。百年の重鎮、一旦にして丘墟たり。士民のここに住む者、遺憾無きこと能はず。後、數十年、堤を築き渠を疏し、治水に法有りて、河身も亦た漸く遷徙す。ここに於いて始めて再築の議あり。時に朝矩君の裔、直侯君、國に當たり銳志以て改修を圖る。直克君封を襲ふに迫り、遂に復た幕府に請ひて役を創む。士民これを聞き、舞踏驩欣し、富める者は財を輸し、壯なる者は力を獻む。文久三年に經始し、慶應三年に至りて工を竣ふ。規模前に比して頗る廓し。ここに至るまで凡そ九十六年、しかうしてここに舊觀を復す。この歳川越自り遷り。藩士に従ふ者數千、戸口日に殖ゆ。この地素より物産に富み、絹絲の利尤も饒かにして、藩吏も亦懲慝勸奨し、洋外に輸出する者極めて多し。既て王政革新せられ、藩を廢し縣を置く、復た城郭を毀つ。この時に方たりて人心皇皇として、或いは衰替するを懼るるも、幸ひに父老の營畫すること百計、朝廷も亦たその地固より都會爲るを以て、羣馬縣廳を牙城に置き、以て一國を治めしむ。衙署學校の設け有り、公司館廠の擧る有りて街衢日に殷富に趨むき、人口今四萬に贏て市制を施さ見。然れども嚮に城を撤し治を遷して、井邑蕭條たり。儻し直侯、直克、兩君の再築の功有るに非ずんば安んぞ今日の隆興を觀るを得んや。ここに於いて舊封の士民その遺德を追念し、來者に諗ぐる所以を謀る。乃ち城址の一隅を卜して碑を建てんと。委員某をして來りて予に文を謁は使む。因つて古今の興廢と盛衰の概を叙べ、系くるに銘を以てす。曰く。

上毛の野古より豊殖を稱らる。彼の亂離に及び弱肉強食す。地は必ず争ふに居り民は息ふるを得る莫し。幕府鎮を置くは勲舊の親藩なり。懷柔撫綏し煦濡して恩有り。河患この城垣を壞つを奈ともする無し。誰か再び營築すこれ松平氏なり。崇き墉屹たる有り河水清駛す。産業勃興す繭絲と麻桌と。維れ茲に都て會り鬱として名區と爲る。碑を樹て德を紀す永へに懷ひて渝ること勿かれ。喬松蔭敷し古城の隅。

(一九〇八)
明治四十一年三月

從五位伯爵松平直之題額 正五位日下部東作書 田中禾年刻

【新字体】 前橋城址之碑

前橋市大手町一丁目一番一号

勅選議員正四位勲三等文学博士重野安繹撰

前橋城は未だ創置を詳らかにせず。旧くは鹿橋に作り、後に今の字に更む。蓋し長野氏の族、鹿橋氏世これを守ると云う。その地は上野の国の中央に在り。利根

川西に流れ、妙義・榛名・赤城の諸山遥かに西と北とに峙す。稱げて形勝と為す。永禄の初め、上杉景虎来りてこの城に抛り、八州を蹂躪して、前橋の名世に著

る。後、武田氏に属す。織田右府武田氏を滅ぼし、その将瀧川一益をして関東管領と為し、以てここを鎮め使む。右府、害に遭うに及び、一益西奔し、遂に北條氏に

帰す。北條氏亡びて、徳川氏関東に徙り、平岩親吉ここに居す。尋いで酒井侯重忠を封ず。八世の孫忠恭に至り、寛延二年姫路に転封して、松平侯朝矩来り代わる。

利根川毎歲漲溢し、城壁漸く壞圯するを以て、明和四年、幕府に請いて治を川越に移し、城、遂に廢せらる。百年の重鎮、一旦にして丘墟たり。士民のここに

住む者、遺憾無きこと能わず。後、数十年、堤を築き渠を疏し、治水に法有りて、河身も亦漸く遷徙す。ここに於いて始めて再築の議あり。時に朝矩君の裔、直侯君、

国に当たり銳志以て改修を図る。直克君封を襲うに迫り、遂に復た幕府に請いて役を創む。士民これを聞き、舞踏驩欣し、富める者は財を輸し、壯なる者は力を献む。

文久三年に經始し、慶應三年に至りて工を竣ふ。規模前に比して頗る廓し。ここに至るまで凡そ九十六年、しこうしてここに旧觀を復す。この歳川越自り遷り。

藩士に従う者数千、戸口日に殖ゆ。この地素より物産に富み、絹糸の利尤も饒かにして、藩吏も亦懲慫勸奨し、洋外に輸出する者極めて多し。

既に王政革新せられ、藩を廢し県を置く、復た城郭を毀つ。この時に方たりて人心皇皇として、或いは衰替するを懼るるも、幸いに父老の營画すること百計、朝廷

も亦その地固より都会為るを以て、群馬県庁を牙城に置き、以て一国を治めしむ。衙署学校の設け有り、公司館廠の挙る有りて街衢日に殷富に趨むき、人口今四方

に贏て市制を施さる。然れども嚮に城を撤し治を遷して、井邑蕭条たり。儻し直侯、直克、両君の再築の功有るに非ずんば安んぞ今日の隆興を觀るを得んや。ここ

に於いて旧封の士民その遺徳を追念し、来者に諭ぐる所以を謀る。乃ち城址の一隅を卜して碑を建てんと。委員某をして来りて予に文を謁わ使む。因つて古今の

興廢と盛衰の概を叙べ、系くるに銘を以てす。曰く。

上毛の野古より豊殖を稱らる。彼の乱離に及び弱肉強食す。地は必ず争うに居り民は息うるを得る莫し。幕府鎮を置くは勲旧の親藩なり。

懷柔撫綏し煦濡して恩有り。河患この城垣を壊つを奈ともする無し。誰か再び營築すこれ松平氏なり。崇き塘屹たる有り河水清駛す。

産業勃興す繭糸と麻桌と。維れ茲に都て会り鬱として名区と為る。碑を樹て徳を紀す永えに懷いて渝ること勿かれ。番松蔭敷し古城の隅。

(一九〇八) 明治四十一年三月

従五位伯爵松平直之題額 正五位日下部東作書 田中禾年刻